

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

モロッコ、彼女たちの朝

2019年/モロッコ・フランス・ベルギー合作映画
配給：ロングライド/101分

2021 (令和3) 年9月9日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：マリヤム・トゥザニ
出演：ルブナ・アザバル/ニスリン・エラディ/ドゥア・ベル
ハウダ/アジズ・ハッタブ/
ハスナ・タムタウイ

👁️👁️ みどころ

モロッコは名作『カサブランカ』（42年）で有名だが、日本に初上陸したモロッコ映画が本作。1980年にモロッコで生まれた女性監督は、“彼女たちの朝”をどんな問題意識でスクリーン上に？

今の日本ではシングルマザーに何の抵抗もないが、アラブ社会では父なし子（＝ふしだら女）は以ての外。臨月の腹を抱えて、美容師の職を失った若い女性は何？他方、夫を失ったことで笑顔も失ってしまったパン屋の女主人は？

どこまで親切に？どこまでお節介？本作中盤ではそんな“彼女たち”の葛藤と本音のぶつかり合いを見ながら、ラストでは彼女たちの“再生”をしっかりと考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■モロッコ映画が日本に初上陸！監督は？テーマは？■

日本でモロッコの長編劇映画が劇場公開されるのは、本作がはじめて！えっ、そうなの？「モロッコ」といえば、すぐに『カサブランカ』（42年）に結びつくほど、『カサブランカ』は有名な名作だが、ハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンが主演した『カサブランカ』は当然アメリカ映画だ。もともと、本作の舞台もモロッコ最大の都市カサブランカだから、親しみやすいかも？他方、本作の邦題は『モロッコ、彼女たちの朝』だが、原題（英題）は『ADAM』。この原題では何のことがさっぱりわからないが、邦題を見ればなんとなく分かったような・・・。

本作の監督・脚本は、本作が長編デビュー作となる、1980年にモロッコのタンジェで生まれた女性マリヤム・トゥザニ。パンフレットの「Director's Note」によると、本作は、彼女が実際に会ったある女性との“出会い”を元に生まれたものらしい。マリヤム・トゥザニ監督は、「私自身が母になるにあたり、一刻も早くこの物語を書き、伝えなければ

ならないと感じ」、その結果、「彼女のエピソードに、私自身が負った傷や喪失感、苦悩、拒絶、癒えることのない悲しみを交えて作った」そうだ。なるほど、なるほど。そう考えると、本作の邦題にも納得！

■□■ “彼女たち”の立場は？ “彼女たち”の出会い？ ■□■

邦題にある「彼女たち」の1人は、カサブランカの街で臨月のお腹を抱えながら、仕事と寝る場所を求めてさまよっている女性サミア（ニスリン・エラディ）。住み込みで雇ってくれるよう頼み込んでいた彼女の話によると、彼女は美容師らしい。そんなサミアは、なぜ今こんな苦況に陥っているの？

「彼女たち」のもう1人は、通りに面した小さな店舗兼自宅でパンを焼いて生計を立てている女性アブラ（ルブナ・アザパル）。彼女には幼い一人娘のワルダ（ドゥア・ベルハウダ）がいたが、ワルダのパパは？ そんな「彼女たち」の出会いは、かなり異例のものだ。

マリヤム・トゥザニ監督が自分の体験をもとに演出した本作では、サミアの姿を見るに見かねたアブラが、一夜限りの宿を提供する最初のシークエンスが興味深い。ワルダがサミアに「お姉ちゃん」と声をかけたのは、好奇心のなせる技。したがって、アブラはそんなサミアを見ても、見ぬフリをすれればいいだけなのに、なぜアブラはサミアに声をかけたの？ もっとも、どうせ泊めてやるのなら、もう少し笑顔を見せて親切にしてやれば……。私はそう思うのだが、なぜアブラは笑顔1つ見せないの？

■□■ どこまで親切に？ どこまで融和？ 身分証明書は？ ■□■

思いがけず一夜の宿を与えられたため、路上で寝ないで済んだサミアが、翌朝お礼を言って出て行こうとしたのは当然。しかし、そこでアブラがもう何日かの居候を許可したのは一体なぜ？ それを聞いたサミアはもちろん、一晩ですっかり友達になった（？）ワルダも大喜びだが、アブラはサミアにどこまで親切にするべきか、突き放すべきかを悩んだのは当然。アラブ社会では、未婚の妊婦は「ふしだら」と後ろ指を指されるから、サミアを家に迎えることは、未亡人のアブラにとって世間体が悪いのは当然だ。そのうえ、サミアは身分証明書も持っていないのだから、その出自は？ まさか、前科者ではないだろうが……。

そんな心配もあったが、現実とは全く逆で、サミアはパン作りも上手らしい。それがわかったのは、サミアが手作りのルジザを提供した時だ。生地を薄く紐状に伸ばす作業に時間がかかるため、アブラも作るのを止めてしまったルジザは伝統の味だったから、ワルダはその味に大喜び。余ったルジザを店頭に出してみると、客の反応は上々で、即完売に。これなら、サミアの存在価値は明白だ。追加のルジザを作りながら、サミアが幼い頃に祖母から教わったコツをワルダに伝える風景は微笑ましいもの。昨日まで以上に、2人の仲は親密になったようだ。しかし、それってアブラにとってはいいこと？ それとも……？

そんなことをあれやこれやと考え悩んだアブラは、結局サミアを追い出してしまったから、ワルダが「冷たい」と涙ながらに抗議したのは当然だ。そんな「母娘対決」が発生する中、アブラはいかなる行動を？ どこまで親切に？ どこまで融和？ 本作中盤に見るそんな悩ましいストーリーをしっかりと味わい、かつ考えたい。

■□■思い出の曲あれこれ！この曲を封印？このお節介は？■□■

年末・大晦日恒例のNHK「紅白歌合戦」の視聴率は、マックス時は81.4%だったが、今やがた落ち。60歳くらいまでは毎年見ていた私ですら、近年は観ていない。それは、知らない曲や、歌えない曲ばかりになってきたからだ。逆に、BSテレビで近時多くなっている昭和歌謡の番組を見る機会が増えてしまった。「人生80年」になった今の時代、「歌は世につれ、世は歌につれ」だから、「思い出の曲あれこれ」を語り合えば、尽きることはないだろう。

本作中盤は、モロッコでもそれが同じだということを見せつけてくれる。それは、アブラが封印していた、歌手ワルダのヒット曲「Batwanes Beek」の入ったカセットテープを巡るストーリーだ。これは居候生活に慣れてきたサミアが部屋の掃除をしていた時に見つけたものだが、なぜ戸棚の中に“封印”されていたの？“思い出の曲あれこれ”は人によってさまざま。そして、そこには楽しい思い出もあれば、悲しくてやりきれない思い出もある。そう考えれば、アブラが封印していた歌手ワルダの曲をサミアが勝手にかけるのは以ての外。居候という立場を大きく超えて、アブラの内心に立ち入るのは無礼千万。それくらいのことは分かるはずだが、なぜあえてサミアはアブラを挑発するような大音量でこれをかけたの？「早く消して。パパが死んでから一度も聞いていない！」と叫ぶワルダの声も無視し、サミアはテープを切ろうとするアブラを力づくで阻止したから、このバトルはずごい。

本作中盤に見る、女同士のまさに力づくでの押し合い(?)は、迫力満点の展開になるので、それに注目！居候に過ぎないサミアから、そこまでの仕打ちを受けたアブラの反応は？そして、サミアはなぜあえてそんな行動を？

■□■女性差別は？女たちの苦悩は？監督の問題意識は？■□■

本作は、導入部から中盤にかけて、サミアのことを“見て見ぬフリ”ができず、居候を許してしまうアブラが、本来優しい女性であるにもかかわらず、終始サミアに対して鉄仮面のような仏頂面をしている姿が印象的。そんな顔を向けられていると、サミアもそれと同じような顔になるのは仕方ない。しかし、サミアはワルダから笑いかけられるとすぐに笑顔で応じているし、その笑顔はかなり魅力的だ。もっとも、アブラは日常生活ではワルダに対してもいつもそんな仏頂面だが、勉強を教えている時だけは笑顔を取り戻していた。それは、明るくて率直な娘の成長がアブラの生きる原動力になっているためだが、他方でアブラが失ったものはナニ？それは、サミアとの“本音の対決”を終え、懐かしいメロディと幸せな記憶に身体が揺れ始めたアブラが、その晩、サミアに打ち明けた夫の最後の話を聞けばよくわかる。それは、愛する夫の遺体に触れることすら許されず、男たちの手で早々に埋葬されてしまったことへの怒りと絶望だが、モロッコではなぜそんな扱いを？モロッコ(=アラブ社会、イスラム社会)での女性差別、女たちの苦悩はいかにばかり……。

米軍撤退後のアフガンは再びタリバンの支配下に置かれ、イスラム流の女性観が復活し

つつあるが、1980年にモロッコに生まれた女性監督マリヤム・トゥザニの問題意識は如何に？

■□■出産は？子供は養子に？店の継続は？アブラの再生は？■□■

本作のラストはタイトルどおりの「彼女たちの朝」になるので、それに注目！モロッコには、家畜をアッラーに捧げる祭、イード・アル＝アドハーの日があり、その日は、街は興奮で活気づくらしい。イード・アル＝アドハーの今日、今やサミアも貴重な戦力になっているアブラの店は、スイーツ作りにてんでこ舞いだ。アブラに心を寄せる食材屋の男スリマニ（アジズ・ハッタブ）も、客が店に押し寄せる様子を笑顔で見守っていた。

そんな中で、突然サミアの陣痛が始まり、アブラの家の中で無事出産を終え、アダムが誕生するわけだ。日本では今やシングルマザーは至る所にいるから、その事に劣等感や罪悪感を持つことはないが、アラブ社会ではシングルマザーは大変。父なし子（ふしだら女）は以ての外だ。しかし、アダムを産み落としたサミアは、かねてから言っていたとおり、赤ん坊の顔も見ないうちに、また授乳もしないうちに、養子に出してしまい、自分は故郷に戻って普通の結婚をするの？それとも・・・？

他方、もう1人の「彼女たち」（＝アブラ）については、サミアに出会い、サミアの出産の手助けをし、サミアの人生に大きく関与したことによって、夫が死亡した際に受けたアラブ社会の女性差別からいかに立ち直るかという“心の再生”がテーマになる。

もっとも、本作ではそれが両者とも描かれることなく、観客の解釈に委ねられているので、本作鑑賞後はそれをしっかり考えたい。

2021（令和3）年9月15日記